令和7年度　学校評価表（最終）

三原市立西小学校（校番5）

a 学校教育目標	b 経営理念 ミッション・ビジョン
夢や目標の実現に向けて， 自ら学び　ともに伸びようと行動する児童の育成	【ミッション】志を抱き，その実現に向けて考え，行動できる未来の創り手の育成 【ビジョン】「自ら学び　ともに伸びようと行動する」という教育風土がある学校 ＜めざす学校像＞「安心安全な学校」「すべての児童に学びの居場所がある学校」「すべての児童に主体的な学びを実現する学校」 ＜めざす子供像＞「規律あるかかわり合いを通して，自ら考えともに伸びようとする子供」「ふるさとに愛情と誇りを抱く子供」 ＜めざす教職員像＞「児童を守り，育て，育む」という職責を自覚し，行動する教職員

評価計画					自己評価									改善方策	学校関係者			
c 中期経営目標		e目標達成のための具体的方策（大枠）	f 評価項目	指標	令和7年12月 h 達成値（参考）	目標値	10月 h 達成値	2月 h 達成値	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方策	I 評価 イ	ロ	ハ	m コメント
確かな学力 主体的な学びを実現する取組を通し，学力の定着と本校の目指す資質・能力の育成を追究する	【主体的な学びを実現する授業づくりによる学力定着】		単元末テスト（国語，算数，社会，理科）の学級平均値が指標に示す点を超える教科数（20教科） 【評価時期】（7月　12月）	平均値 1・2年生（90点） 3・4年生（85点） 5・6年生（80点）	67%	88／88教科	60%	67%	91.7	B	単元末テストに関わる指標の達成数及び達成値は、前回から以下のように推移した。 （1学年　2学年　3学年　4学年　5学年　6学年　全学年） 全学年　達成比　4/8　0/8　8/16　4/16　22/32　15/16　53/88 達成度　50.0%　0%　50.0%　25.0%　31.7%　93.8%　60.2% 海村　達成比　5/8　0/8　9/16　6/16　23/32　16/16　59/88 達成度　62.5%　0%　56.3%　37.5%　95.8%　100%　67.0% 網掛け部分が前回の中間報告よりも上昇したものを表しており、6学年中5学年で達成した。また、学校全体でも7%（5項目）アップしたことから、学校全体で取り組んできたこれまでの改善方策に一定の成果があったと考える。 一方で、依然として低・中学年では目標に届いていない項目も多くあり、課題が残った。また、学校全体を見ても、算数科の「思考・判断・表現等」の観点において、目標値に到達していない学級が46.2%（6/13学級）あった。さらに、回観点で平均80点を下回った学級が5学級あり、他教科と比べても最も多かった。よって、算数科の「思考・判断・表現等」に課題があると言える。 児童アンケートにおいては、（あ）の項目で目標を達成した。前回に続き、強い肯定回答が50%を超え、「分かる授業」への取組には一定の成果があったと言える。一方で、（い）は僅かに目標に届かず「分かる授業」が行われる一方で「自ら学び方を考え、工夫する」部分には課題が残った。児童が学び方を選択する授業の実現には、学習規律や主体性の育成等、学習のペースを整える必要があると考える。 ●教職員アンケートでは、前回課題のあった（オ）の項目において約10%の向上が見られた。研修が教職員のスキル向上のみならず、意識の向上にも繋がったと考える。	学力の定着に向け、以下の3点の取組を行っていく。 ①学力定着状況の分析及び取組の計画・実施 標準学力調査の結果等をもとに、各学年でこれまでの学習内容の躓きを分析し、具体的な取組や定着の見取りについて計画を立案し、取り組んでいく。 ②算数科の授業研究（来年度に向けて） 今回課題のあった算数科について、2月に本校の算数専科の授業をもとに授業研究会を行う。その際、学習規律を整えること等授業づくりの根幹に関わる内容についても協議し、教職員の指導力向上を図る。そして、来年度は課題のある算数科を研究教科に設定して授業研究を行えるように、研究部を中心に計画の立案を進める。 ③学力定着に向けた校内体制づくり 中間報告より取り組んでいる「やりきるタイム」を継続して実施する。これまでの取組の成果として、自ら学習に取り組めるようになった児童が増えたことや宿題忘れが減ったこと、かけ算九九を習得する等基礎学力の定着に効果があったこと等が挙げられる。今後も、担任だけでなく、管理職や専科の教員も含む学校体制の下で取り組んでいく。また、学力に課題の見られた2～4年生を中心に行っているT2指導も継続していく。	5人中5人			・自分を律する力が定着してきた様様。本来子ども達は遊びが主体だと思う。自分に厳しくすることは素晴らしさえ感じるが気分転換の重要性もウカウントが必要だと思う。 ・「やり切りタイム」の継続で自ら学習に取り組めるようになった児童が増え、宿題忘れが減ったことはこれまでの取組の成果だと思う。 ・児童が自分で学び方を考えて工夫する方法」とは？具体的な対策にはどんなことが考えられるのか。 ・算数科においては、指導形態、指導法の工夫、授業研究を通して成果が出ている。この取組を国語科にも生かしてほしい。 ・国語科の思考力、表現力の向上が生徒指導の一助になると思う。「やり切りタイム」の成果も出ている。この取組を継続するとともに、児童の学習に対する姿勢、自己肯定感の向上につなげてほしい。 ・算数科の成果が出ることを期待している。
	課題に対して根拠を伴う論理的な自分の考えをもち、互い意見を大切にし、自らの考えを高める R80を核とした授業デザインを通して、各学年で身に付けるべき学力を確実に定着させる	・根拠をもとに考えたことから自分の考えを表現する授業づくり（下線を引く、三角ロジックなど）【研究部】 ・「なぜだろう」と強く感じる「問い（めあて）」と、「問い（めあて）」に対する「答え（まとめ）」を設定した授業づくり【研究部】 ・「R80」を活用した「学びのゴール」から逆算した「めあて」を設定し,45分間でデザインした授業づくり ・学習規律の徹底し，親和性のある学習集団づくり【研究部】【生徒指導部】 ・ねらいを達成するために，ICT機器等を活用した授業づくり【研究部】 ・実生活や実社会の課題を解決するプロジェクト型学習の充実【研究部】	単元末テスト（国語，算数，社会，理科）の学級平均値が全国平均以上の教科数（16教科）【評価時期】（1月）	全国平均以上の教科数	13教科	16／16教科	未実施	81%								
			○児童質問紙よりアンケートによる調査 （あ）授業の内容がよく分かります。＊ （い）わからないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができています。＊ 【評価時期】（7月　12月）	肯定的評価の全学年平均割合	（あ）94.8% （い）81.3%	（あ）85% （い）85%	（あ）111% （い）102%	（あ）112% （い）95.6%								
			○教職員アンケートによる調査 （ア）根拠をもとに考えたことから自分の考えを表現する授業づくりを「下線を引く、三角ロジックなど」を活用して行った。 （イ）「なぜだろう」と強く感じる「問い（めあて）」と、「問い（めあて）」に対する「答え（まとめ）」を設定した授業づくりを行った。 （ウ）「全体でのシェアまであるR80」を活用した「学びのゴール」から逆算した「めあて」を設定した45分間での授業づくりを行った。 （エ）学習規律の徹底し，「他者説明」「聞くことを大切にした指導」などを取り入れ、親和性のある学習集団づくりを行った。 （オ）ねらいを達成するために，授業の始めにデジタル教材を提示したり，「置き換える」「共有する」の視点でICT機器等を活用したりするなど授業づくりを行った。 【評価時期】（7月　12月）	5項目肯定的評価の平均割合	90%	102%	103%								
豊かな心と調和性の高い集団	【規範意識の育成】		icheck「自己肯定感」「学級適応感」のクロス集計結果が全国平均以上の児童の割合 【評価時期 】（6月　12月）	全国平均を上回る学級数	8／13学級	13／13学級	62%	77%	95%	B	○icheck「自己肯定感」「学級適応感」のクロス集計結果は、13学級中10学級が全国平均を上回った。3学級が全国平均を下回っており、自己肯定感の低い児童やいじめや対人ストレスで悩んでいる児童など、支援を要する児童が多い実態がある。 ○教職員アンケートによる調査「全ての児童に学びの場がある。」については、99%だった。所属学級だけではなく、SSRを利用する児童（8名）、相談室を利用する児童（2名）、リモート授業を受ける児童（1名）がいる。また、発達面や相談面で気持ちの切り替えに時間がかかり、なかなか教室に戻れない児童いる。不登校児童に学びの場を提供しようと働きかけているものの、それらを活用できず、登校にでない児童が4名いる。 ○児童質問紙によるアンケート調査については、「きまりやルールを守る」「注意されたら、1回で直す」の項目に関して、児童の肯定的評価が下がった。この結果について、きまりやルールを守れていない児童が、気道のオンラインゲーム等や家庭などできまりについて繰り返し指導してきたにもかかわらず、きまりやルールを具体的に理解し、守れていない自分について自覚ができ始めたと捉えるが、規範意識の低さは大きな課題である。また、教員がこれに取り組んだ生活のきまりに関するRoboで学級ごとに振り返りを行ったことは、自分達の学級を自分達でより良くするという視点を持たせることができ、よい場面が見られた。今後は、児童が自分やお兄さんを守れるように、「生活のきまり」を集める材料として使える具体的な取り組みを考える。 ○困ったことがあったとき、先生や友だちに相談できる」という児童の肯定的評価が上がった。「いじめ等やいじめにつながる事案の早期発見に向けて早期始めと早期末に、個人面談（全校児童）を実施したこと、「全ての児童が見守る教員で行い、きまりについて同じ方向で指導し続けたことなど、安全・安心な学校に向けて一致団結して取り組んだことが起因すると考える。教職の真摯な姿が、児童に信頼を与えたのではないかと考えるしかし、中には、悩みを自己も相談できず、長い間悩んでいたという児童もいた。今後も、継続して全教員で安心安全な学校づくりを進めていく。 ○いじめについて、学期始めと学期末の面談を継続した。いじめに関する事案に気付いた場合は、教育（学年主任、生徒指導主事、管理職）と連携して、個別対応を行った。教育児童のレのケアはもちろん、加害児童には特別な指導を行った。良質者に寄添ったその。今後のより良い成長に向けて、三者で継続を行った。先生や友達に相談できる児童が多いことから、今後も常に児童の様子に注意して、教育相談を続けていく。	児童の割合100%	96%	100%	96%	99%								
	安心して学べる学習環境の基盤となる，規範意識の醸成を図るとともに，自他を尊重する心情・態度を育成する	【共感的な人間関係づくり】	児童質問紙によるアンケート調査 （う）「学校のきまりやルールを守って生活をしている」 （え）「注意されたら、1回で直している」 （お）「自分にはよいところがある」 （か）「努力すれば，自分もたいていのことは出来ると思う」＊ （き）「困ったことがあったとき，先生や友だちに相談できる」 （く）「将来の夢や目標を持っています」 （け）「地域のことが好きです」（1，2年生） （こ）「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」＊（3～6年） 【評価時期】（7月　12月）	児童質問紙肯定的評価の割合	（う）92.4% （え）86.1% （お）80.3% （か）68.4% （き）83.1% （く）83.1% （け）95.8% （こ）79.9%	（う）95% （え）100% （お）85% （か）85% （き）100% （く）85% （け）85% （こ）85%	100% 91% 100 104% 80% 100% 102% 102%	97% 86% 95 104% 83% 98% 113% 94%								
			いじめ事案やいじめにつながる事案を把握し、児童と保護者、学級の児童に対応する。【評価時期】（7月　12月）		100%	100%	100%	100%								
		・全ての児童に，学校内（学校外も含めて）に「学ぶの場」がある取組【生徒指導部】 ・全ての児童が，困った時に学校の中に相談できる人や場がある取組【生徒指導部】 ・「聞く」ことや「学び合い」を大切にした授業づくり【研究部】【生徒指導部】 ・ねらいをもった児童同士の交流の場がある学級活動の充実【生徒指導部】	児童に，他者とかかわり合う場面を与え，その中で，自己肯定感を高めさせるとともに，相手を大切にする心と親度を身に付けさせる													
健やかな体	生涯にわたって健康を保持増進し，豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成する	【生涯にわたって健康づくりをしようとする健康教育の充実】 【生涯にわたって運動しようとする心情の育成につながる授業改善】	児童質問紙よりアンケートによる調査 （さ）体育の授業は楽しい （し）運動することは楽しい＊ （す）おうちで決めた時刻に寝ている 【評価時期】（7月　12月）	肯定的評価の割合	（さ）89% （し）90% （す）74%	（さ）90% （し）90% （す）80%	（さ）98% （し）98% （す）96%	（さ）99% （し）100% （す）93%	97	B	○児童質問紙よりアンケートの肯定的評価は「体育の授業は楽しい」89%、「運動することは楽しい」90%であった。また、2つの項目とも月ごのアンケートよりポイント高い結果であった。この結果から、これらの2項目が数値が高いのは授業改善によるものと考えられる。授業の流れが定着し、体育の活動の時間も長くなっている。引き続き、児童の運動量がある「楽しい体育」の授業づくりに取り組む必要がある。 ○「おうちで決めた時刻に寝ている」の項目は74%であった。この項目については、長年、課題がある。また、学年やクラスによってばらつきがあり、前回は高学年ほど数値が低い傾向にあったが今回は低学年も数値の低いクラスが見られた。また、児童に話を聞くと習い事や家庭の事情などで睡眠時間が足らないという児童も多いようなので、家庭と連携した取組が引き続き必要である。	児童に確かな目標を持たせ、生涯にわたって健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現しようとする心と体を育成するために、次の3点について取り組む。 ①運動量があり、自分の目標に向かって挑戦することができる体育科等の授業づくりを目指して、短縄を使っていろいろな技に挑戦するためのカードを作成し、取り組む。 ②児童同士が「見る」ことを大切にした体育科の授業づくりを目指して、見学する人が友達のがんばっている姿を「見る」ことができるカードを作成し取り組む。 ③「寝る時刻」については、睡眠の大切さなどを参観日の学校からの話に入れたり、保健だよりに記載したりすることで、保護者や児童の意識を変える取組をする。	5人中5人			・体育の授業及び運動することは楽しいと児童が思っているという事は、ルールも工夫し自ら決め一層わいてきて皆でやっている感覚を持つのだと思う。（一つの成長） ・「寝る時刻」「睡眠時間」については個人の差があり、一斉指導の難しさがあると思う。「やより毎日15分早く寝る」の目標設定はできそうな気がする。（ハードルを低くから始める） ・楽しい体育の授業づくり、自分の体力、敏力が自覚できる工夫をすることが大切。 ・睡眠時間の確保が学力向上や生徒指導に直結している。継続をお願いしたい。 ・児童の成長に極広い基礎体力作りが重要だと考える。
働き方改革	教育課題に適切に対応する学校体制を再構築するとともに，学校行事及び総合的な学習の時間の内容を精選することを通して，児童に向き合う時間数を確保するとともに，職員の健康を維持する。	教育課題に適切に対応する学校体制を再構築するとともに，行事等の精選をし，児童に向き合う時間を確保する。 ・行事等の内容を精選し，行事に係る練習時間数を減少する。 ・総合的な学習の時間、生活科の内容を「じっくり、ゆっくり」と探究できる内容に精選する。 ・各部が担当する行事を精選する。 ・関係機関・団体と連携する取組について，学校が担う業務を軽減する。 ・生徒指導事案の未然防止の取組及び組織的に対応する体制をつくる。	○市の方針「勤務時間上限の目安時間」「上限の目安時間及び特例的な扱い」に記載されている内容を達成する。 上限目安時間・45時間/月を超えない。・360時間/年を超えない。 特例的な扱い・720時間/年を超えない。・45時間/月を超える月は，1年間に6月まで。・連続する複数月のそれぞれの期間について，1カ月当たりの平均が80時間を超えない。 【評価時期】（8月末・1月末）	勤務時間外の在校時間　全教職員年間360時間以内,月45時間以内の割合	67%	100%	69.5%	66%	66%	C	○後期10月～12月は、生徒指導事案の未然防止に継続的に取り組み、生徒指導部会や児童会からのリモート朝会で学校全体に対して学校の決まりを提示したり徒説したりする具体的な動きで全校の意識統一を進めた。45時間を超える勤務時間外の割合は1ほぼ前期と同じであった。 ○3学期に入り、複数対応する事案に対して教職員が対応するには結対数が少ないため数値的には前期に比べ2ポイント減となった。 ○生徒指導事案の未然防止及び児童に向き合う時間の確保を継続して進めていく。	①継続して生徒指導事案の未然防止を組織的に取り組む ②「児童に資質、能力をつけるためにどのような取組がよいのか」を検討することで、行事の内容を精選し、児童に向き合う時間の確保をさらに進める。 ③年間の授業時数を遵守し、働き方とのバランスを図っていく。	5人中2人	5人中1人	5人中2人	・低学年ほどこまでどのように理解できているのか伝達力が弱いのか不明である。 ・教職員のメンタルヘルスを充実する。 ・教職員の時間保証は生徒指導の未然防止や教科指導の継続で少しでも減少できればと思う。 ・先生方が健康を損ねない働き方を願う。

研究主題　主体的に考え、ともに伸びようと学ぶ児童の育成　～論理的に考えを形成し、ともに高め合う国語科授業づくりを通して～

イ：自己評価は適正である。
ロ：自己評価は適正でない。
ハ：分からない。